

離愁：詩

著者	中井，正文
雑誌名	龍南
巻	2 2 4
ページ	3 3 - 3 4
発行年	1933-03-02
URL	http://hdl.handle.net/2298/7107

離愁

中井正文

あまり樹木が多いので繊細な都會の風が

うつかり通りすぎてしまつたやうなクマモトの街よ

こゝで空氣は古い聖書の表紙の鞣革の匂ひがした

昔ながらの人情

埃のつもつた家風

浮氣で伊達な文明は見馴れぬ街で道に迷つてしまふ

古い日本の傳統を身をもつて傳へる優しい女達の犠牲

封建的な道德はそれ自身悲愁であるか

浮世繪の女の寂しさが白粉の影にひそんでゐた

カール・ハキンリヒの未裔達の小さなロマンスよ

豊醇な酒と儼しい武士道の街よ

雨の日のやうにしめやかにも心愉しかつた日々よ

はじめは親しめなかつた素朴な方言の街は

思ひ出の中にこそ懐しく生きるだらう

若い日の夢に満ちたスキヤンダルのやうに

—Bon voyage ! Kumamoto!

一抹の哀愁をのこして旅立つのは僕達だつた